

高村 薫

マークスの
山

Marks' Mountain
by Kaoru Takamura



著者 高村 薫 1953年、大阪に生まれる。国際基督教大学を卒業。商社勤務をへて、'90年『黄金を抱いて翔べ』で第3回日本推理サスペンス大賞を受賞。'93年『リヴィエラを撃て』で日本推理作家協会賞、『マークスの山』で直木賞を受賞。'98年『レディ・ジョーカー』で毎日出版文化賞を受賞。他に『神の火』『わが手に拳銃を』『地を這う虫』『照柿』『晴子情歌』雑文集『半眼訥訥』などがある。

やま
マークスの山 (出)

たかむら かおる
高村 薫

© Kaoru Takamura 2003



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2003年1月24日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社書籍業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-273491-5

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

マークスの山(上)

講談社

元警視庁刑事 故 鍬本 實敏 氏へ

マ
ー
ク
ス
の
山
(上)
目
次

一 播 種 15

二 発 芽 108

三 生 長 245

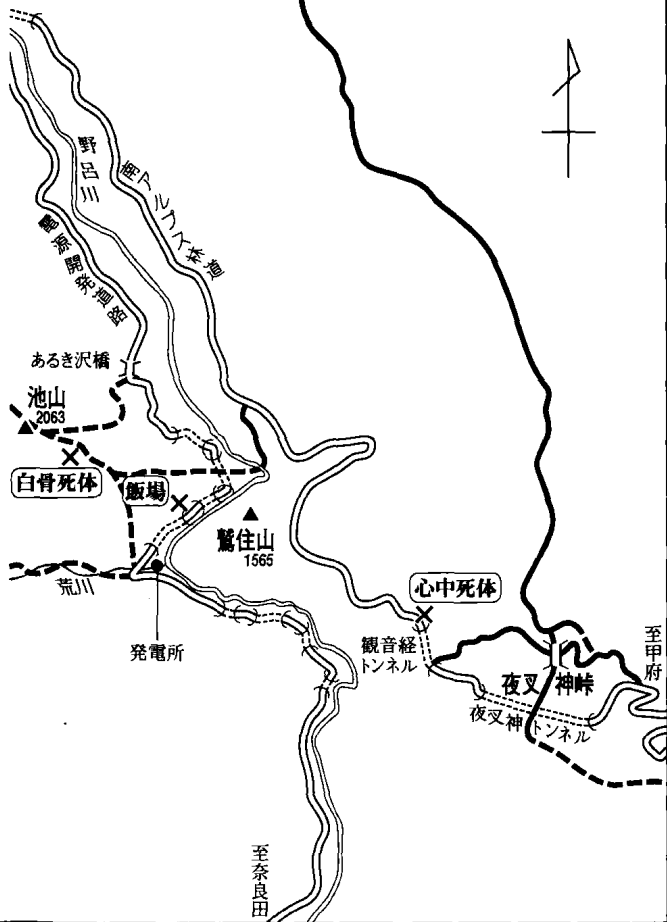
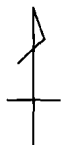
マークスの山(下) 目次

四 開 花

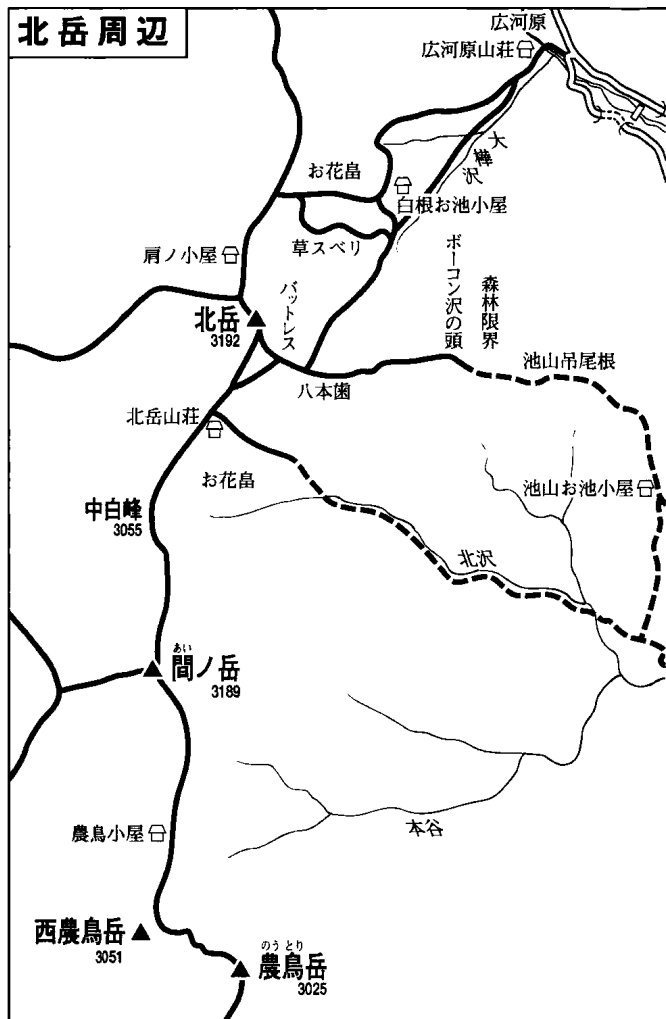
五 結 実

六 収 穫

解説



北岳周辺



マルクスの山(上)

この暗い壁は何だろう——。ぼくは目を見開き、上も下もない闇が割れるような音を立てているのを聞く。

山だ。黒一色の山だ。顔に刺さる冷たい棘は風か、雪か。覚えているのは、少し前まで身体じゅうの穴という穴を塞いでいたガス臭だ。夢中でその臭いから逃れた後、気がつくとぼくはそそり立つ真つ黒な垂壁の底におり、足の下凍ったアスファルトが微かに光っていたのだった。しかし辺りは暗すぎ、道路らしいものがどこへ続いているのかも見えなかった。

山だ。黒一色の山だ。稜線も何もないただ真つ黒な土塊の壁がのしかかり、路肩の下はまた黒い壁が落ちていくばかりの山だ。

ぼくは**ずいぶん**歩き、どこかで峠の名前の書かれた標識を見たが、自分が登ってい

るのか下っているのかも分からなかった。かきわけてもかきわけても垂れてくる雪のカーテンは網膜に張りついて消えず、風なのか山の音なのか、天空を回り続ける轟音もいまは耳や脳髓に棲みついて離れない。

そうだ、ぼくは父さんや母さんと車に乗っていたのだ。かすかに思い出し、振り向いたが、車などもう影も形もない。山だ。黒一色の山だ——。

一 播 種

昭和五十一年秋

岩田幸平は夕刻から飲み始めた一升瓶を空にした後、飯場の床に敷いたゴザの上で眠り始めた。昨日から腕時計がどこかへ消えてしまったのだが、それで不都合があるわけではなかった。もう何年も、一升瓶一本を空けるのにかかる時間と、山の気温の下がり具合や夜陰の深さなどで、獣のように必要最低限の時刻を知り、それに従って自然に生きてきたからだ。空いた瓶を放り出して横になったとき、深夜零時にはまだ時間があると岩田は無意識に考えた。そうして我ながら下らねえ人生だと思い、なに、寝て起きてまた一日過ぎるだけだと独りごちたりした後、いつも通り睡魔がやって来た。

石炭ストーブはよく燃えていた。立て付けの悪い窓は、冬が近づいたこの季節には朝から晩までガタガタ鳴りつ放しだった。二日前に初雪が降り、その夜は今秋二度目の雪になって